コロンボのウェサック祭とシンハラ・ナショナリズム

澁谷利雄

はじめに

本テーマへの関心の背景としては，まず卒業論文でスリランカの仏教復興運動と日本との関わりについて取り上げて以来，仏教復興と日本との関係に関心をもち続けてきたことがある[1]。第二に，1980年から82年にかけてコロンボ大学に留学し，シンハラ社会の祭りについて調査する機会を得たこと[2]。第三に，イギリスの歴史家ホブズボームによる「伝統の創造」という視点に触発されたこと[3]。そして，何よりも1996年3月から1年間にわたりコロンボに住む機会があり，14年ぶりにウェサック祭を見聞しながら日本との関わりやシンハラ・ナショナリズムについて考察することができた，という経緯がある。ウェサック祭（vesak utsavaya)は，スリランカのシンハラ社会最大の祭りである。シンハラ語でより正確にはウェサック満月祭（vesak pasalosvak davasa)というべきであろう。サンスクリット語では“vaiśāka”，パーリ語では“vesākhā”と呼ばれている。それは古代インドに始まる仏教的祝祭である。タイやラオス，ミャンマーなど上座仏教の諸社会でも，今日，同一の日に祝されている。簡潔にいうならば，ウェサック祭とはゴータマ・シッダールタの生誕，成道，涅槃を記念し祝う祭りである。その生誕について日本では，4月8日の灌仏会，より一般的には花祭りとして祝されている。

スリランカのウェサック祭にはさらに神話・歴史書『大王統史（マハーワンサ）』もとづいて，仏陀三回目の来訪と，シンハラ王国の建設者ウィジャヤ王子の来島という神話的出来事が付加されている。仏陀は，夜叉とナーガ族（頭がコブラで体は人間の姿）を帰依させこの島を浄化し，人間が住みうる土地にする。その後，仏陀が涅槃の床にある時，インドのラー

ラ国を追放されたライオンの血を引くウィジャヤ王子の一行が漂着する。仏陀はインドラ神を介してウプルワン神[4]に王子の上陸を保護させる。なぜなら　ランカー島は仏法が五千年間にわたって栄えるべきところであるから，という。王子は夜叉を征服しシンハラ王国を建設する。ウェサック祭では仏陀の生誕，成道，涅槃に加えて，仏陀三回目の来訪日，ウィジャヤ王子の来島日がいずれもシンハラ暦第二月にあたるウェサック月（グレゴリウス暦ではほぼ5月に該当）の満月の日に生じたとされている。

1996年のウェサック祭

信仰心の薄い筆者でも，日本で4月8日に催される花祭りで，仏像に甘茶をかけながら仏陀の生誕を祝うことを知っている。しかしながら。それはテレビや新聞などから得る知識であって，未だに参加する機会を求めていない。筆者にとって花祭りとは，寺院内で執り行われる小さな祭りという印象である。

ところがコロンボに住んでいると，仏教徒以外の者であれ外国人であれ，ウェサック祭から逃れることはできない。筆者が初めてウェサック祭を経験したのは1980年のことである。仏教旗が随所にひらめき，寺院では多数の白衣の老若男女が儀礼に参与していたこと，各所に飲食物を振る舞う布施所（dnsala）が建てられたこと，夜間は友人と連れ立って大通りを歩きながら，提灯に似たウェサック・クードゥワや仏陀や仏教にまつわる絵解きボードともいうべきウェサック・トラナ，ジャータカを演じる人形芝居などに胸をときめかせたことを記憶している。 その後1989年にタイでウェサック祭を見聞する機会を得た。タイでもスリランカと同じ日に行われていたが，その形態は著しく異なっていた。人々が連れだって寺院を詣でて仏像や仏舎利塔を礼拝する点は同様であるとはいえ，大通りには布施所も，ウェサック・クードゥワやウェサック・トラナ，ジャータカ芝居，仏教旗も見られなかった。

1996年5月，筆者は16年ぶりにコロンボのウェサック祭を経験した。こ

の年のウェサック祭は仏教暦2540年にあたっていた。各月の満月の日は満月のポーヤ（精進日）として休日となっている。ウェサック月にはその翌日も休日とし，ウェサック祭は二日間にわたって催されている。96年の場合は5月3，4日に行われた。

実は，今回のウェサック祭は異様に低調であると事前に巷で語られていた。筆者も以前の経験を想起しながらそれを実感した。理由はいくつか考えられた。まず，前年から激化している第3次民族戦争と呼ばれているタミル・イーラム解放の虎[5]と政府軍との戦闘である。解放の虎は96年に入ってからも，1月末にコロンボ中心部の国立銀行を爆破し，新年前日の4月12日にはコロンボ港に特攻攻撃を試みている。政府軍は4月半ばよりジャフナ半島で攻勢に出て，占領地を拡大しつつあった。コロンボではいつ爆弾テロがあっても不思議ではなかった。また，新年から2週間あまりしか期間がなかったため，祭りの準備，とりわけ資金の工面が容易でなかったこと。さらには，150年来という日照りによる水不足のために3月から停電が実施されていたこともあった。

それでも正月休みがあけてしばらくすると，ウェサック・クードゥワ用の骨組みが売られるようになった。まもなくマーケット近辺ににわか作りの店が立ち，装飾用の紙やウェサック・カード，線香，絵像，お面，灯明用の素焼き容器などウェサック用品を売り始めた。祭りの当日，寺院の儀礼には数多くの人々が参列し，街路に飲食物の布施所が設けられ，各家では灯明を灯しウェサック・クードゥワを掛けていた。

ウェサック祭は本来，光の祝祭である。無知を象徴する闇を払拭すべく，出来る限りたくさんの灯明を灯すのである[6]。祭りは二種の行為から成ると考えられてきた。すなわち，「プラティパッティ・プージャーワ」と「アーミシャ・プージャーワ」である。前者は寺院で実践される八戒または十戒，瞑想を指している。後者には，布施，トラナ，クードゥワ，芝居が含まれる。今日，コロンボを中心に肥大しているのは後者である。初日はどちらかというと寺院での儀礼参加に重点が置かれ，二日目は娯楽が

主体である。寺院内で行われる儀礼は，各月に約４回（朔月，上・下弦，満月）めぐってくるポーヤのものとほぼ同一である。ただし，ウェサック月の満月の日は一年中で最も多数の人々が参集する。

なんといってもウェサックに街路を歩く楽しみは，ウェサック・クードゥワとトラナの見物である。大通りに面した役所や会社の入り口には，多面体や蓮の花から，船や飛行機を模したものまで趣向をこらした壮麗なクードゥワが見られる。なかにはモーターで動かす大掛かりなものもある。今回は，コロンボ南郊ラトゥマラーナの回転大クードゥワを見物した。幹線道路わきの空き地に10メートル以上もあるヤシの葉を用いたドームが作られており，入場料は大人で10ルピー（約20円）であった。当地の有力者が毎年設置するもので，この年は27回目という。午後8時すぎ，僧の導きで三帰五戒を唱えて開始する。州政府大臣などのあいさつの後，スイッチを入れる。池の魚をだまして食べていたツルがとうとうカニに首をチョン切られてしまうという，ジャータカ物語の一説（baka jatakaya)が6枚の絵に描かれていた。この回転大クードゥワは翌月の満月の日（仏教伝来を記念するポソン祭）まで設置されることになっていたが，初日から長蛇の列ができていた。

もっとも大掛かりで入念な飾りはウェサック・トラナである。トラナとは，古代インドの村に設けられた四つの門に由来するという。シンハラ語では，「儀礼の際に立てられるアーチ」を指している。ウェサック・トラナは「門」というよりは，電球やネオンで飾られた大きな絵解きボードというべきものである。いずれも仏陀の生涯やジャータカ物語を描いている。

今回トラナは市内で二か所のみであった。筆者は家族とともにデマタゴダに出掛けた。駅近くの広場に12メートルほどのトラナがそびえていた。中央には後光がきらめく仏陀の座像，その下にジャータカ物語が描かれている。電球とネオンがめまぐるしく変転し，まるで極楽浄土が出現したかのようである。ラウド・スピーカーからは，片面太鼓（rabāna)を打ちながらうたう吟遊詩人の声が流れている。トラナの前に立ちつくす数百人の会衆。

別の広場には，メリー・ ゴーラウンド，観覧車，オートバイの曲乗り，オバケ屋敷があり，子連れの家族でにぎわっていた。メリー・ ゴーラウンドはバンドの生演奏付きである。観覧車は人力であった。オバケ屋敷は12畳ほどの広さで，真っ暗な迷路状の通路を進む。スリランカの種々の悪魔やガイコツ，ドラキュラに出くわし，吊り橋を渡ると，ライト・ アップされた仏陀の絵像を見て出口となる。暗澹たる世界から光明を得て，さわやかな解放感を味わった。まさに，ウェサック祭のテーマの核心を体験した思いである。

こうした娯楽の場所にはシンハラ人だけでなく，タミル人やムスリム，カトリックなど多様な民族や集団がひしめいている。交通手段も，徒歩，バス，トラック，トラクターと様々である。主体は下層から下層中産階級である。上層中産階級以上はおおむね家のなかでテレビを観て過ごしている。なかにはヌワラエリヤのような避暑地の別荘に出かける者もいる。

テレビではウェサック特別番組が組まれ，ウェサック・キャロルが歌われていた。白衣の集団が，仏陀や仏教に関連した詩を歌うのである。また，ウェサック・カードもよく交換されている。しかしながら，街頭で演じられるジャータカ芝居は市内ではまったく見られなかった。1980年のウェサック祭では布施所の前を通るたびに呼び止められ飲食を勧められたが，今回その数は格段に減少していた。

ウェサックでは古来，無知を象徴する闇を払拭すべく数多くの灯明を灯す。寺院では八戒・十戒を実践し，布施を行い，各家庭では素焼きの器やパパイヤを用いて灯明を灯し，芸能集団の演じるジャータカ芝居を観る。ウェサック・クードゥワも灯明の延長とみることができよう。それにしてもウェサックが「お祭り騒ぎ」になったのはそう古いことではなさそうである。ウェサック・キャロルとかウェサック・カードといった外来語の使用や，電気仕掛けのクードゥワやトラナを見ても察しがつく。クードゥワ（kūḍuva）とはシンハラ語で鳥などの「巣」を意味するが，一見，提灯を思わせる。竹の骨組みに美しい紙を貼り，ロウソクや電灯を灯す。日本の

提灯が起源らしいという話を筆者はどこかで読んだか聞いた覚えがある。

そこで，この機会にウェサック・クードゥワのルーツを探りながらウェサック祭の変遷を見ておこうと思い立った。幸い，国立文書館でウェサックの歴史資料に詳しい副館長K.D.パラナウィターナ氏の協力を得ることができた。氏からは，今日見られる大掛かりなウェサック祭の始まりは仏教復興運動およびナショナリズムに深くかかわっているので，1880年代，90年代の新聞，雑誌等に眼を通す必要があるとの御教示を得た。『サラサウィ・サンダレサ』や『ディナミナ』など古いシンハラ語新聞はマイクロ・フィルム化されていた。英語の仏教雑誌『ブディスト』は現物を手にとって読むことができた。

仏教復興運動

スリランカでウェサック祭に対する関心が高まるのは，仏教復興運動が生起する時期である。全島がイギリス支配下にあった19世紀半ばにコーヒー・プランテーションの開発が始まる。それは急速に成長し，まもなく植民地経済体制の基軸となる。この時，土着のシンハラ人，タミル人，ムスリムの商業資本家もすばやくプランテーション経営に乗り出し，コーヒーやシナモン，ココヤシ栽培を手掛けるようになる。彼らはコロンボに居を構え，新興のエリート層を形成していく。子弟の多くはキリスト教学校で英語教育を受けたが，家庭では民族宗教と民族言語を保持していた。官吏や医師，教師などの職につく者もしだいに増えていった[7]。

こうした新興のエリート層のなかから1860年代に植民地支配に対する抵抗の動きが出てくる。それは，支配者の宗教としてのキリスト教に対し，伝統宗教を盛んにして民族の誇りを取り戻そうというものであった。すなわち，仏教，ヒンドゥー教，イスラーム教の復興運動が展開されていく。

最も強力に推進されたのは多数民族シンハラ人を背景にした仏教復興運動であった。コロンボを含む低地（pahata rata)[8]と呼ばれる西部沿海地方では，細々とではあるがすでに仏教再興の動きが始まっていた。たとえば，

1806年にはコロンボ最初の仏教寺院，ディーパードゥッタ・ラーマヤ寺（アマラプラ派）とパラマーナンダ寺（シャム派）がコタヘーナに建立されている[9]。ヨーロッパ人の支配下で拡大，発展してきたコロンボは，永年にわたってキリスト教の街だったのである。仏教復興運動の興隆とともに仏教寺院は続々と立てられていった。僧侶の育成にも力が注がれ，1845年以降，仏教僧院学校がコロンボおよび近郊に設立されていった。

低地の僧侶主導のこうした運動を画する出来事として，1873年8月に西海岸のパーナドゥラで2日間にわたって行われたキリスト教との論争がある。仏教側はすでにイデオローグとして知られていた僧ミゲットゥワッテ・グナーナンダ，キリスト教側はウェズレー派の主教デーヴィッド・ダ・シルワであった。論争はグナーナンダが優位に立ったので，シンハラ聴衆の間に熱狂が沸き起こった。これを機にシンハラ人は，仏教徒であることに一段と誇りと自信を深めた。公開の宗教論争は当初，キリスト教団が異教徒に改宗を促す手段であったが，グナーナンダは逆手にとって仏教宣伝の機会に利用したのだ。パーナドゥラ論争は仏教の勝利としてシンハラ語と英語で内外に紹介され，欧米でも注目する人々が現れた。

とくに神智論者はグナーナンダと連絡を取り合うようになり，まもなく仏教復興運動への積極的な関わりが始まる。神智協会は，1875年にアメリカ人弁護士ヘンリー・オルコットと，霊媒として知られたロシア人のヘレナ・ブラヴァツキー女史によってニューヨークに設立された。その背景は，東洋の神秘や精神への関心としてのオリエンタリズムやオカルト・ブームであった。神智協会には欧米の自由主義者や無神論者，フェビアン派社会主義者が加わった。いわば，キリスト教を精神的支柱とした近代西欧文明のなかで，それに反発し批判した反体制派の知識人たちである。彼らはとりわけ仏教とヒンドゥー教に関心を抱き，スリランカやインドの反植民地運動にも同情を示した。グナーナンダを始めとするスリランカの急進的な人々はこれを歓迎し，神智協会の会員となり出版物を購読するようになる。英語教育を受けていたエリートの間ではすでにイギリスの自由主

義文学が読まれており，グナーナンダもパーナドゥラ論争で引用していた。欧米では1879年に出版されたエドウィン・アーノルドの著作『アジアの光り』が仏教への関心をいっそう喚起した。

ウェサック祭の公休日化

神智協会は1880年に本部をマドラスに移した。オルコットはブラヴァツキーを伴って同年5月に来島し，南部のガーッラ港から上陸する。仏教を攻撃しスリランカを支配するためではなく，支援するためにやって来た始めての白人として，彼らは熱烈な歓迎を受ける。さっそくオルコットの発案で，仏教学校建設と仏教教育推進のためにコロンボ仏教神智協会が設立された。この組織は出家と在家の二部門から成っており，とりわけ在家仏教徒の結集を促すものとして画期的であった。出家も全宗派を束ねていた。仏教的伝統の希薄な低地地方で，仏教についてあまり知らない人々の手による仏教復興は，ほとんど新たな創造に近い。新興のシンハラ人エリートは仏教再興にあたって，高地の伝統に頼るよりもオルコットら神智協会の支援や欧米での仏教研究の成果に依拠したのだ。

仏教復興運動は明らかに，低地のシンハラ人商業資本家層の利害を反映したものであった。プランテーション，銀行，外国貿易の基幹部門はイギリス人に独占され，輸出入業や卸売業はインドの商業資本が仕切っていた。小売業でもムスリムやチェティヤと競争しなければならなかった。官僚の職についてもタミル人やシンハラ人キリスト教徒と争った。彼らにとって最大かつ直接に利害がぶつかり合うのは，タミル人，ムスリム，シンハラ人キリスト教徒の商業資本家たちであった[60]。

コロンボで仏教徒とキリスト教徒の間で1883年3月に生じた暴動は，以上のような背景に起因していた。場所は，シンハラ人仏教徒の商業資本家が居を構え始めたコタヘーナである。イースター祭に対抗して，パーナドゥラ論争の論客ミゲットゥワッテ・グナーナンダの寺院では一週間のピンカマ（功徳を積む儀礼）を催していた。カトリック教会の前を仏教徒の

ペラヘラ（行列）が通過した際に衝突が生じ，暴動化したのである。

オルコットはグナーナンダの要請を受け，1884年にスリランカを再訪し，仏教徒側を代表して事件後の処理にあたった。この機にオルコットは，仏教徒が要求していたウェサック祭の公休日化を1885年に総督に認めさせる。こうしてウェサック祭は，仏教徒が共通して祝うとともに民族意識を鼓舞する年中行事として，仏教復興運動の重要な戦術のひとつとなる。オルコットはクリスマスをモデルにして，ウェサック祭再編のために種々の発案をしている。たとえば，クリスマス・キャロルを模したウェサック・キャロルや，クリスマス・カードをまねたウェサック・カードをあげることができる。またオルコットを中心とした仏教神智協会では，仏教徒の世界的な連帯を目指して1885年に仏教旗を考案した。デザインは，ブッダガヤで悟りに達した時に仏陀に発した後光からとっている。すなわち，青，黄，赤，白，紫および以上の色を合わせたものから成る。仏教旗はウェサック祭を初めとする様々な祝祭や仏教儀礼，結婚式，葬式，政治集会などに用いられていく。

まさにキリスト教に対抗するためにキリスト教の祭りをモデルにしてウェサック祭を再編成したというべきである。シンハラ人の間の反イギリス支配の気運のなかで，新しいウェサック祭はコロンボを中心に急速に普及していく。1887年5月24日の『サラサウィ・サンダレサ』には「ウェサック祭（英文）」と題する記事がのっている。

全島をあげて町や村で偉大な時を祝福すべく互いに競い合った。すなわち，旗や色とりどりのランプ，飾り付け，行列がいたる所でみられたのだ。こうした深遠な民族的喜びは，最も完璧な規律と作法をもってあまねく表現されたのである。

・・・・・ここではとくに，コロンボの大通りにみられる華やかな様子について記しておこう。大きな行列の通過するマラダーナからグランド・パス，ペッターに至る通りに沿って，日中は旗や花輪で，夜は色と

りどりのランタンで美しく飾られている。マーリガカンダやコタヘーナ，そしてとりわけキャラニヤ寺院では，昼夜を通して熱心な参拝者でにぎわっている。聖歌隊の数は前年より増加していた。特筆に値するのは，6 日の夜にペッターでC ・ドン・バスチャンが率いる一団が，ランプや旗で飾られた家々を歌いながら練り歩いたことである。

ある驚くべきかつまた喜ぶべき装飾の特色は，我らが師仏陀の栄誉ある御旗の多用であった。我らが聖なる師の後光の色彩を正しく描いているこの荘厳なる御旗は，神智協会によって採用され，今や我らの信仰に最適のシンボルとして広く受け入れられている。

1887年というとウェサック祭が公休日となってから2年あまりに過ぎないが，コロンボでは視覚に訴える華々しい祝祭が催されているのがわかる。なかでも仏教旗，ランタン（ランプ），キャロルが特筆されている。いずれも今日のウェサック祭で不可欠の要素である。ちなみにC・ドン・バスチャンは，オルコットの発案を受けてウェサック・キャロルを開始した人物である。ランタンやランプとは，ウェサック・クードゥワの先駆けと思われる。いずれも外来語であるから，国外から持ち込まれたものと考えられる。

ウェサック・ランプと提灯

1889年4月30日の『サラサウィ・サンダレサ』紙には，大々的なウェサック用品の広告のチラシが入っている。ピタ・コトゥワ（ペッター）のN.S.フラナーンドゥの店でウェサック・ランプ用の各種の紙，ガラス製および紙製のランプ，ロウソク，旗などに用いる布地の宣伝である。新聞による初めてのウェサック用品の広告と思われる。

1890年4月18日の同紙には，日本から輸入されたウェサック・ランプとビルマ製ロウソクが，サン ダレサ事務所（仏教神智協会内）で販売されるとの広告がのっている。ちなみに日本製ランプは1個50セントとある。さらに同

年５月２日付けの同紙には，ウェサック・カード(vaiśākha citra patra)の広告が登場する。以後，毎年ウェサック前になると日本製ランプの広告が現れる。

1891年5月29日付け『ブディスト』の「2435年（仏教暦）のウェサック」と題する一文では，コロンボの様子を次のように記している。

> 草木や椰子，種々の仏教的な図案や語句を描いた透かし絵，すてきな色彩の中国および日本のランプなど，おびただしい装飾の数々は，尊師が愛するこの国の人々の間に仏教復興と，徐々にではあるが着実にその平和的な宗教が発展していることを確信させるに十分であった。

ここには「中国のランプ」という表現があるので，中国あるいは東南アジアの華人地域からも輸入していたのだろう。しかし，新聞広告には「中国製ランプ」という表現はまったく現れない。もっぱら，「ウェサック・ランプ」，「ウェサック・ランタン」，「ウェサック・パハン（灯明）」，または「日本から輸入されたランプ」と記されている。

1893年4月21日付け『サラサウィ・サンダレサ』には，ピタ・コトゥワのS.ウパーリスによる「ウェサック祭（vaiśākha utsavaya)」と銘打った大きな折り込み広告が入っている。これには，３，４０種のウェサック・パハンを仕入れたとあり，うち７種のパハンが絵入りで解説されている。一見して提灯とわかる。“pahan” とはシンハラ語で「灯明」を指しており，“lampu” や”lantan”とほぼ同義である。

続いて次のように記している。

> これ以外に当店には日本のウェサック・パハン多数あり。とても美しい日本のパハンが1個25セント，一番大きなパハンで1ルピー，小さなものは25セント。すてきな形に彫刻を施した，たくさんの花飾りのついたとても明るい一番大きなパハンが1ルピー75セント。

絵入りで紹介されている提灯についてはどこのものかは示されていない。日本製の値段はそれより幾分高めである。広告主のS．ウパーリスは，1889年にウェサック用品の大広告を出したN.S.フラナーンドゥの店に勤務していた人物である。製造・輸入先が複数あるなかで日本だけが明示されている。やはり日本の提灯が重要だったのである。なぜならオルコットおよび仏教復興運動の指導者たちは日本に強い関心をもっていたからである。

当時オルコットの発案を実行に移すうえで決定的な役割をもったのは，半僧・半俗の指導者アナガーリカ・ダルマパーラ（1864-1933)であった。コロンボの富裕な家具商の生まれで，ドン・デーヴィド・ヘーワーウィターラナと名付けられた。キリスト教学校で英語教育を受けていたが，一方でパーナドゥラ論争で勇名を馳せたグナーナンダの寺にも出入りした。祖父が仏教神智協会の会長をつとめていたので，早くからオルコットやブラヴァツキーらと接触している。1884年に仏教神智協会に入会，86年からは仏教学校設立の運動を進めていたオルコットの助手をつとめた。たちまち頭角を現し，英文機関紙『ブディスト』やシンハラ語紙『サラサウィ・サンダレサ』の編集をまかされるようになる。彼は後にインドの仏教聖地ブッダガヤの修復運動を起こし，仏教徒の国際的な連帯をつくりだした。

彼の主要な活動は，仏教教育を通してシンハラ人の民族意識を高めることであった。有髪のまま黄衣を着用し，自らアナガーリカ・ダルマパーラ（放浪の護法者）と称し，独身を貫いた。アナガーリカとはパーリ教典では，僧侶を指していたが，彼の場合は出家と在家の中間的な身分として用いた。有髪のままの黄衣は，まさにこうした身分を体現しているというべきである。スローガンは「酒を飲むな」，「牛肉を食べるな」で，激しい禁酒運動も展開した。

ダルマパーラの仏教思想の特徴は，プロテスタンティズムの価値観に根差した現世的な禁欲であり，在家の役割の強調であった。仏教教団の腐敗を批判し，僧の社会活動への参与を訴えた。勤勉と節約を唱え，神々や悪霊などの信仰を否定し仏陀のみを日々拝するよう説いた。彼は出家と在家

の差異を縮小させ，在家のままのアラハン到達の可能性を主張した。これらの思想には，キリスト教学校での教育と神智論者との交友が少なからず作用していたであろう。

スリランカ出身の文化人類学者G.オベーセーカラは，ダルマパーラが唱導した仏教をプロテスタント仏教と呼んでいる。それはエリート層がアイデンティティの危機を克服しようとする動きでもあった[11]。彼らの多くはキリスト教学校で英語教育を受けたが，家庭では仏教とシンハラ語を保持していた。出身地の村社会との関係は疎遠になりつつあったが，そうかといってコロンボにしっかりと地歩を築くには至っていない。イギリス的教養と生活様式を身につけても，イギリス人と対等・平等に扱われるわけではない。プロテスタント仏教は，そのような分裂状態のなかでエリートが精神的にも社会的にも自己の居場所を確立しようとする運動であった。

こうした運動は民族の自治や独立を意識させるようになり，シンハラ・ナショナリズムが醸成されていく。ダルマパーラは，神話・歴史書『大王統史』を新たに解釈し活用した。その根幹は，「仏法の島(Dhammadhīpa)」，「ライオンの島(Sīhadhīpa)」，「アーリヤ人種」である。

「仏法の島」は，同書に言及された仏陀三度の来訪や，5千年間わたって仏法がさかえるという仏教的な選民思想に依拠している。「ライオンの島」は，建国神話に基づいている。ウィジャヤの父母は，オスのライオンとベンガルの王女との間に生まれた双子の兄妹であった。ウィジャヤと700人の家来はインドのラーラ国を追放され，ランカー島に漂着しシンハラ王国を建設する。これをもってダルマパーラは，ランカー島の住人はウィジャヤを共通の祖先とするライオンの末裔であると解釈する。

「アーリヤ人種」の主張は，西欧のオリエンタリストの思想に深く関係している。「アーリヤ」は「ドラヴィダ」と同様，オリエンタリストによって言語分類の概念として提示されたが，その後人種概念として誤用された。ダルマパーラは，言語学者がシンハラ語を北インドの言語とともにアーリヤ語系に分類したことに，ウィジャヤ王子の北インドからの来訪譚

を結びつけたのである。ダルマパーラにとってスリランカは，仏陀の教えを信仰するライオンの血を引くアーリヤ人種のシンハラ人の国でなければならなかった。ダルマパーラの思想をとらえるうえで，日本との関わりは見逃せない。オルコットや仏教復興運動の指導者たちの影響と思われるが，ダルマパーラは早くから日本に関心を寄せ，ヘンリー・ノーマンなどオリエンタリストの文献を読んでいた。1889年，日本仏教界の招きに応じたオルコットに従って渡航し，3カ月間滞在する。途中，上海あたりでリウマチに冒されたため，滞日中はほとんど病院生活を送らなければならなかった。しかし，この訪問は彼の日本観を決定的なものにした。ちょうど大日本帝国憲法発布の式典に接し，西欧の技術を用いながら発展しつつある近代日本の胎動を眼のあたりにするのである[23]。この時，ダルマパーラは日本人が提灯を用いる様を見たにちがいない。体調がおもわしくないので，彼はオルコットに先立って一人で帰国の途につく。英文でつづられた1889年5月14日付けの彼の日記には，自分が注文したランタン(提灯)の荷が同じ船に積まれていることを記している。

ここでウェサック・ランタンに話を戻そう。「サラサウィ・サンダレサ」では1887年にウェサック・ランプに言及しており，89年4月には大々的な広告が現れる。いずれも輸入先は示されていない。それ以前からランタンが輸入されていた可能性も十分ある。「日本のランタン（ランプ，パハン）」という表現が登場するのは，『サラサウィ・サンダレサ』，『ブディスト』ともに1890年以降である。それはまさに，オルコットとダルマパーラが日本から帰国した翌年にあたっている。日本からの提灯輸入がいつから始まったのかは定かでない。しかしながら，少なくとも両人の日本訪問以降に，「日本のランタン」と表示することに意義が生じたのである。それは彼らが，日本を将来のスリランカのモデルと考えたからに他ならない。

シンハラ・ナショナリズムとウェサック祭

神智協会の本部は南インドにあったとはいえ，オルコットは仏教復興運動を精力的に支援した。1890年までに40校の仏教学校が開校された。欧米人の神智協会員も教鞭をとった。キリスト教の教理問答書を模して仏教問答書を作成した。また，各地の仏教寺院にキリスト教の日曜学校をまねて仏法学校（daham pāsala)の開設をすすめた。1898年にはYMCA(Young Mens Christian Asociation)にならってYMBA(Young Mens Buddhist Asociation)を設立し，全国の仏法学校を統括した。これらの発案はオルコットであったが，実務はダルマパーラを中心にすすめられた。

しかしながら，オルコットとダルマパーラのコンビは1900年代初めに決裂する。きっかけは，オルコットがキャンディの仏歯寺の歯を単なる動物の骨と見なしたことによる。古来，仏歯の保持はシンハラ王権の正当性の根拠であった。オルコットのプロテスタント的合理主義は，ダルマパーラには耐え難かったのである。この時期にダルマパーラは，まさにオルコットの指導下から脱して，自らの仏教復興運動を構築しながらシンハラ・ナショナリズムの基本テーゼ ― 仏法の島，ライオンの島，アーリヤ人種 ― を醸成しつつあった。ダルマパーラは，よく知られていた書物の一説を用いたに過ぎない。しかしそれは，ダルマパーラ流に解釈され，当時の時代状況に対応すべく鋳直されて提示されたものであった。シンハラ王権の正当性を主張してきた『大王統史』が，シンハラ民族の聖典として用いられたのである。つまり，同書に依拠してシンハラ民族を創造しようとしたのである。ウェサック月の満月の日は，仏陀の生誕，成道，涅槃の他，仏陀３回目の来島日であり，シンハラ王国の建設者ウィジャヤ王子の上陸日でもあるのだ。「仏法の島」は仏陀の来島に，「ライオンの島」と「アーリヤ人種」はウィジャヤ王子の上陸に直結する。

ウェサック祭の強調は人々に聖なる物語り『大王統史』の世界を喚起し，ダルマパーラの主張した３テーゼを印象づけることができる。ウェサック祭の再編は，新たなエスニック・アイデンティティとシンハラ人仏

教徒の連帯をつくりだす好機であった。指導者たちにとってそれは，支配者イギリス人やシンハラ人キリスト教徒，タミル人，ムスリムと対抗していくための重要な戦術だったのである。かくして，ウェサック祭の盛況のなかからシンハラ・ナショナリズムが生成されていく。この時，日本の提灯は単なる祭りの装飾ではなく，シンハラ・ナショナリズムの形成に深く関わる政治的シンボルだったのである。ウエサック祭に導入された提灯の背後には，新興資本主義国として近代化を昂進する日本国家の姿があったというべきである。

今日のウェサック・クードゥワと日本の提灯を較べると，似ていると思いながらも隔絶した印象を受ける。輸入された提灯はたちまち人気を博し，普及していったようである。率先したのは仏教神智協会であり，『サラサウィ・サンダレサ』は有力な媒体であった。1890年4月22日付けの同紙には，コロンボ仏教神智協会書記の名で，ウェサック・ランプ販売店の一覧が広告されている。それは，コロンボを初めとしてマハヌワラ（キャンディ），ガーッラ，ガンポラ，クルナーガラ，マータレー，ヘタン，ベンタラに及んでいる。普及していくにつれ，ある時点からシンハラ人の手により彼らの美意識に従って作られ始めたにちがいない。「ウェサック・クードゥワ」という呼称は，提灯がシンハラ化したことを示している。今や，日本や中国の提灯がウェサック・クードゥワの起源であることなど知る者はほとんどいない。スリランカ土着のものと思っている人々が大半である。

仏教復興運動の指導者たちは，ウェサック祭を華々しく演出することにより仏教とシンハラ民族意識の活性化を図ったのである。仏教についてあまり知らないシンハラ人にとっては，自分たちの宗教について学ぶ機会であった。街路を積極的に用いた視覚に訴える祝祭は，異教徒・異民族に対し，コロンボで仏教および仏教徒の存在証明を突き付ける方法であった。指導者たちは演出のひとつとして日本の提灯を選び，輸入・販売し，普及させた。他の装飾品の販売も盛んになり，ウェサック祭はたちまち商品化

された。祭り用品だけでなく，食料，衣類など各種商品の特売広告も増えていく。指導者の多くは商業資本家であり，祭りの演出は彼らの利益に沿ったものに他ならない。ウェサック祭の肥大は，シンハラ商業資本家の勢力増強の過程そのものであった。

ウェサック・クードゥワと並んで，ウェサック・トラナも今日のウェサック祭では不可欠な要素である。美術史に詳しい彫刻家のアーリヤワンサ・ウィーラッコディ氏の御教示によると，1930年前後にミュージカルの舞台装飾家のリチャード・ヘンドゥリカスによって考案されたのだという。彼はバーガー（ポルトガル人・オランダ人と土着民との間の混血）であるが仏教徒で，西欧のリアリズム絵画の手法を基盤にして，インドのムガル時代の衣装をモデルにしながら仏教絵画を作成したのである。ウェサック・トラナが大人気となるのは，電気がふんだんに使えるようになる1940年代以降である。題材は，ジャータカや仏陀の生涯のみならず，ランカー島への仏陀来訪譚やウィジャヤ来訪譚に依拠している。

これまで最も盛大にウェサック・クードゥワやトラナが使用されたのは，1956年の釈尊降誕二千五百年祭であるといわれる。それは，プロテスタント仏教とシンハラ・ナショナリズムの高揚と転機を画す一大イベントであった。当時の政治的気運は，社会改革，公正社会，経済自立であった。独立を達成し権力を手にしたシンハラ・ナショナリストが誇りをもって歩み出さんとする時であり，“プロテスト”すべき新たな課題を求めている時でもあった。同年，統一国民党から分かれてスリランカ自由党を率いていたバンダーラナーヤカが総選挙で大勝し，人民戦線政府が誕生した。さっそく，シンハラ語を唯一の公用語とするシンハラ語公用語法を成立させたが，タミル人からは強い反対運動が起こったのである。

スリランカのウェサック祭には，もちろん古来の仏教思想の流れが脈打っている。しかし以上にみたように，今日の祭りの形態の多くが仏教復興運動以来１００年の歴史的所産であるといえる。否，ウェサック祭の変遷そのものがスリランカ現代史に深く参与しているというべきであろう。

注

(1) 澁谷1980。

(2) 澁谷1988。

(3) Hobsbwm, 1983.

(4) ウプルワンは１４世紀以降ヴィシュヌ神とdfyp堂位置し同一視されるようになる。

(5) １９６０年代に結成。武力によるタミル民族解放を掲げて活動している。とくに1983年の反タミル大暴動以降は攻撃を激化し，穏健派のタミル解放統一戦線や他のタミル・ゲリラ諸派を駆逐し，強力な武装集団として政府軍と対峙している。

(6) Disanayaka, 1993.

(7) Jayawardana, 1972.

(8) 1815年まで仏教王国として独立を保持した高地（内陸部）に対し，低地（沿海地方）は16世紀からヨーロッパ人の支配下にあった。

(9) Serasundara, 1996. 今日スリランカには仏教宗派は３派ある。キャンディ王国時代の１８世紀半ばには正式な僧を生み出せないほどに衰退していたが，1753年にタイから僧を招いて再建された。これはシャム派と呼ばれている。1803年にはビルマのアマラプロアマラプラで具足戒を受けた僧がアマラプラ派を，さらに1864年にはビルマのマンダレーで，具足戒を受けた僧がラーマンニャ派を起こしている。

(11) Obeyesekere, 1970.

(12) 澁谷，1980。

参考文献

Bond, G.D. 1988, *Buddhist Revival in Sri Lanka:Religious Tradition, Reinterpretation and Responce*, South Carolina, The University of South Carolina Press.

Disanayaka, J.B. 1993, *The Vesak Full moon Festival.*, London, Ranjith Palansuriya.

Gombrich, R. and Obeyesekere, G. 1988, *Buddhisim Transformed: Religious Change in Sri Lanka, Princeton*, Princeton University Press.

Guruge, A.(ed.) 1965, *Return to Righteousness, A Collection of Speeches, Essays and Letters of Anagarika Dharmapala*, Colombo, Government Press.

Hobsbawm, E. 1983, *The Invention of Tradition, Cambridge*, Cambridge University Press.

Jayawardana, V.K. 1972, *The Rise of the Labor Movement in Ceylon*, Durham, Duke University Press.

前田　恵学編　1986、『現代スリランカの上座仏教』山喜房仏書林。

Obeyesekere, G. 1970, Religious Symbolism and Political Change in Ceylon, *Modern Ceylon Studies, Vol. I-1.*

Paranavitana, K.D. 1973, *vesak dina nivāduva labunu hāṭi*, Dinamina, Vesak Kalapaya.

Serasundara, A. 1996, Trends in Modern Political Buddhism, *Lanka Guardian, Vol.19, No.11.*

澁谷利雄1980「スリランカの仏教復興運動と日本」，長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』，アジア経済研究所。

〃 1988「祭りと社会変動——スリランカの儀礼劇と民族紛争」，同文館。

〃 1996, lankā vesak utsavaya saha japan chouchin, *Sambāšā*, Vol.7.

鈴木正崇1996『スリランカの宗教と社会』春秋社。

立花俊道訳1939,「大王統史」,『南伝大蔵経』60巻，大蔵出版。

Vesak Festival in Colombo and the Sinhalese Nationalism

<Summary>

Toshio Shibuya

The first Buddhist temple was built at Colombo in 1806. The Buddhist revival was beginning in the coastal area. They included the establishment of the Amarapura sect and the Ramanna sect, and, building monastery schools. H. S. Olcott of the Theosophical Society came to Sri Lanka in 1880, and joined the Buddhist revival movement. Soon after that, the Buddhist Theosophical Society was established in order to build Buddhist schools and to promote education based on Buddhism. The Vesak Festival was attached importance to, and was ranked as a higher festival so that it might cope with the other religious ceremonies such as those by Christianity and so forth. Olcott succeeded in making Vesak a public holiday and he pursued a variety of ideas following to Christmas. In reality A. Dharmapala, an Olcott's assistant, took the initiative in carrying out these ideas. The decoration now called Vesak kūḍuva originated from an imported lantern. In 1889 Olcott went to Japan with Dharmapala, who brought back a Japanese lantern. The Sinhalese news paper, issued by the Buddhist Theosophical Society begin to advertise the Japanese lantern from the following year.

Meanwhile Dharmapala started to establish a base of the Sinhalese nationalism referring to the Mahavamsa: the island of Dharma, the island of lions, and the island of the Aryans. In the book the full moon day of the month of Vesak was made the day of Buddha's birth, Enlightenment and the death,the day of Buddha's third visit to Sri Lanka, and also the day of landing at the island by Prince Wijaya who established the Sinhalese dynasty. Reorganizaing the Vesak Festival was, then, closely related to form the Sinhalese nationalism.

The leaders of the Buddhist revival momevement endeavored to revitalize Buddhism and the ethnic consciousness, by carrying out a greater celebration of the Vesak Festival. The celebration, at which streets were positively made use of, was the tactics to demonstrate Buddhism and the Buddhists at Colombo to the other ethnic and religious groups.